令和７年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属：スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格：准教授
氏名：秋葉　倫史

研究課題名	現在分詞語尾の形態からみる「be＋現在分詞」の変遷
研究目的及び研究概要	本研究は，「be＋現在分詞」に現れる現在分詞語尾の形態変化に着目し，古英語から初期近代英語にかけての変遷を記述的に明らかにすることを目的とする。英語史研究において進行形の発達は重要な研究テーマであり，多くの先行研究が意味的・語用論的側面からその発達過程を論じてきた。しかし，現在分詞語尾が「-ende」から「-ing」へと変化した過程については，文献学的記述は存在するものの，通時的コーパスに基づく体系的な検証は必ずしも十分ではない。 本研究では，YCOE（York Corpus of Old English），PPCME2（Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, 2nd edition），PPCEME（Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English）といった歴史コーパスを用い，「be＋現在分詞」構文に現れる現在分詞語尾の分布を調査する。さらに，例文のレジスター情報を用いて，方言差，ラテン語翻訳文献の影響なども考慮しながら，語尾変化の過程を記述することを目指す。 Denison, David. 1993. *English Historical Syntax: Verbal Constructions* . London and New York: Longman. 橋本功. 2005.『英語史入門』 東京：慶應義塾大学出版会. 中尾俊夫・児馬修. 1990.『歴史的にさぐる現代の英文法』 東京：大修館書店.
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	本年度は、本研究課題の前段階として、英語における「be＋現在分詞」構文の通時的分布について、歴史コーパスを用いた基礎的な分析を行った。具体的には、YCOE、PPCME2、PPCEMEなどの構文解析コーパスを用い、「be＋現在分詞」構文の用例を抽出し、各時代における使用頻度および分布の傾向を整理した。 その結果、当該構文の使用頻度は時代によって一様ではなく、古英語期の一部の時期に高頻度が見られる一方、中英語期には低頻度で推移し、初期近代英語期後半以降に増加するという通時的傾向が確認された。また、古英語期の高頻度については、ラテン語翻訳文献の影響や特定の文献への集中など、資料的要因が大きく関与している可能性が示唆された。 以上の分析結果をもとに、「be＋現在分詞の通時的分布―コーパスに基づく記述的分析―」と題する論文を執筆し、日本大学英文学会『英文学論叢』に投稿した。なお、本論文は来年度掲載予定である。本研究は、今後予定している現在分詞語尾の形態変化（-ende から -ing への移行）に関する研究の基礎的段階に位置づけられるものであり、今後は形態的側面および語尾変化との関連を含めて分析を進める予定である。